

R. Browning の詩に見られる愛の挫折

渡 邊 清 子

は じ め に

“Love is best”⁽¹⁾と真心から自信をもって、高らかに愛の賛歌を、生涯を通して歌い続けた詩人は Browning をおいて英文学史上まれであると思う。彼はこよなく人を愛し、人間に興味を持ったが、彼は特にプラトンが「饗宴」(Symposium) の中で明示したように、男女の精神と肉体の合一が真の愛への道であり、人生の最大なる目的の1つであると確信していた。つまり彼はアガベ (Agape) よりエロス (Eros) を中心とするロマン的な愛に重きを置いたのであった。彼は愛こそが生命の源泉であるという立場から、多種多様な異なった側面をもった恋愛詩を多く書き、その重要性を明らかにし続けた。

彼は実生活に於いても Elizabeth Barrett と「世紀の恋」とうたわれた程、熱烈な愛を体験し、それを実証したのである。その顛末については前号の「紀要」で取りあげたから、今回は別の角度から愛の挫折を経験した男性達にスポットをあてて Browning の思想をさぐってみようと思う。

[A] Cristina

Stopford A. Brooke は Browning の挫折に関する詩について次のように述べている。“Moreover, optimist as he was in his final thought of man, he was deeply conscious of the ironies of life, of the ease with which things

※本論文に引用される凡ての詩は下記の全集の Vol. 3 及び Vol. 4 からである。

Sir F. G. Kenyon, (With introductions by); *The Works of Robert Browning*; Centenary Edition In Ten Volumes, (Ams Press, Inc., New York, 1966)

(1) Kenyon, Vol. 3, p. 148. “Love Among the Ruins”.の最終行。

go wrong, of the impossibility of setting them right from without. And in the matter of love he marks in at least four poems how the moment was held and life was therefore conquest.”⁽²⁾つまりいかに楽観的な人生観をもっていた Browning でも、思いもかけぬ人生のアイロニーにより足もとが掬われ、不幸のどん底に落ち入ることのあるは百も承知であったというのである。殊に彼が恋の道にあっては、いかんともし難い、ままならぬ悲しさや苦しさのあることを見逃す筈はなかった。しかし彼の主人公達は恋に破れても、決して青いため息をついたり、意気消沈したりすることは殆どなかった。彼らは必ず何らかの解決の道を見出した。その例として、まず名高い“Cristina”の主人公の場合はどうであったか見てみたい。

“Cristina”は1842年に *Dramatic Lyrics* の中に所載、出版された。8行よりなる8つの節を持つこの詩は、美しいCristinaを一目みて心惹かれ、激しい恋のとりこになった若者の告白である。史実によれば彼女はSpainの女王Maria Cristina (1806-78)で、Ferdinand VIIの4番目の妻である。De Vaneは誇り高い美貌の女王のことを次のように説明する。“She was young, beautiful, passionately devoted to pleasure, and she transformed by her presence the gloomy court of the old and sinister Ferdinand.”⁽³⁾と。1833年に王が死ぬ前に、彼女は娘のIsabellaに王位継承の権利をあたえるように無理に頼み込み、彼女自身は摂政の職に1840年までであった。後年Cristinaはある陸軍武官と秘かに結婚したが、それが発覚したので退位させられた。彼女はそれから夫のMuñozと共にローマ、ナポリ、パリーとはでやかに暮しまわったらしい。De Vaneは更にBrowningがこの詩を書くに至った経緯を次のように語る。“It was probably Cristina’s abdication which drew Browning’s attention to her, and his poem was probably

(2) Stopford A. Brooke; *The Poetry of Robert Browning* (Thomas Y. Crowell & Co., New York, 1902) p. 256.

(3) William Clyde DeVane; *A Browning Handbook* (F. S. Crofts & Co., New York, MCMXXXV) p. 111.

written soon afterwards. It is founded upon the great reputation for coquetry enjoyed by the queen.⁽⁴⁾と。彼によればこの詩は Cristina がその位を追われてから後の世間を騒がせたなまめかしい奔放な生活振りに Browning が目をつけ、それをもとにして書いたのだらうとのことである。しかし Kenyon⁽⁵⁾は De Vane と異なった見解をもつ。Kenyon は Browning は上記に述べられたような Cristina の行跡等問題にせず、ただ美しい女王を主題とし、しかも彼女がまだ女王であった時にこの詩を書いたのだらうと推測している。

さて、この事実の詮索はともかくとして、1人の若者の語る言葉として詩の内容に立ち入ってみよう。1行目は誠に奇抜とも思われる言葉より始まる。

She should never have looked at me

If she meant I should not love her!⁽⁶⁾

つまり「もし私が彼女を愛していけないというのだったら、彼女はあんな目付でこちらをみるべきでなかった!」という程の意味である。

それから続く St. I の内容は次の如くである。美しい女王の瞳が思いのたけを語ろうとしても、心動かさぬ男性はいるかも知れないが、私はそうではない。彼女がまわりの男性を見まわしてから、特に私に目を止めた時、私は激しい愛を感じた。女王も私に対して好意の目差しをむけられた筈だ、と若者は信じる。

(St. II.) 「何ですって? 彼女が私を見つめた時、何の意味もなかっただなんて?」(“What? To fix me thus meant nothing?”)と若者は彼の告白の聞き手から反問されたであらうことに答える。「しかし私にはその目が何を示していたか説明出来ないが、たしかに私の^{たましい}靈魂との合一を願って媚を含めていた。」と彼は自分が自惚れているかも知れないと遠慮しつつも言わざるを得

(4) *ibid.*, p. 111.

(5) F. G. Kenyon; *Vol. 3*, p. xvi.

(6) *ibid.*, *Vol. 3* “Cristina” pp. 134-36.

ない。(“But I can't tell (there's my weakness)/What her look said !”)

(St. III.) 人間はこの世ではほんとに悲惨きわまる存在であるが、神から与えられた愛の一瞬を見失ってしまう程みじめではない。もし我等の^{たましい}靈魂の眞の賜物が、偽物の賜物を明確に区別することが出来るならば、あるいは又、我等の靈魂が己の勝利への正道を追い求めているのか、又は滅亡への邪道を辿っているのかを知ることが出来るならば……と若者は考える。

III

Oh, we're sunk enough here, God knows !

But not quite so sunk that moments,

Sure tho' seldom, are denied us,

When the spirit's true endowments

Stand out plainly from its false ones,

And apprise it if pursuing

Or the right way or the wrong way,

To its triumph or undoing. (St. III)

(St. IV.) 若者は更に考えを深めて行く。

例え暗夜の中にあっても閃光のような、又眞昼にきらめく炎のようなものに比すべき靈感が突如として我らに訪れることがある。(“There are flashes struck from midnights,/There are fire-flames noondays kindle,”) そのような靈感に触れる時、我等が長年かけて積み上げた名誉等空しくなり、脹れ上がった野心も縮んでしまう。(“Whereby piled-up honours perish,/Whereby swollen ambitions dwindle,”) いっぽうこれに反して、初めて十分に味うことの出来た些細なこの愛の靈感は今まで無に過ごした過去の一生の中で唯一最高の業績のように思われる。(“While just this or that poor impulse,/Which for once had play unstified,/Seems the sole work of a life-time/That away the rest have trifled.”) つまりこの若者は女王の熱い目差しを浴びた時、言葉で言いつくし得ない、生れて初めての激しい心のときめきと強

い衝動とおぼえたというのである。その一瞬が彼の一生の中での最高最善の時であって、あとは取るに足りないものであるとの自覚を強めたのである。

(St. V.) Cristina 女王の方でも確かにこの靈魂 (soul) がずっと昔から存在していたことを認めている筈だ、と若者は信じるので、彼の言うことに耳を傾けている人の疑問に答えて次のように言う。

Doubt you if, in some such moment,
As she fixed me, she felt clearly,
Ages past the soul existed,
Here an age 't is resting merely,
And hence fleets again for ages,
While the true end, sole and single,
It stops here for is, this love-way,
With some other soul to mingle? (St. V)

即ち女王はその靈魂は昔あった (存在した) ばかりでなく、今の束の間の一生の間にも存在し、その後にも未来永劫に存在し続けると信じている。しかもその靈魂が現世に止まる唯一のまことの目的は、他の靈魂と恋の道で結ばれることである、と認めているのは疑いないと彼はいう。この St. V こそはまさに Browning の恋愛観が Platonism によるものであることを証明している、と言ってよいと思うのである。更に Browning は若者の告白を通して、彼の思想を展開して行く。

(St. VI.) もしそうでなければ靈魂の生きる目的はなくなり、永久にそれを失くしてしまうことになる。前途に愛以外に望む目当があると思うかも知れないが、それを望めば破滅である。だから Cristina は私の目をみた瞬間に閃めいた靈感によって、2人の靈魂は結ばれるにちがいないと考えたのだ、と若者は確信する。

Else it loses what it lived for,
And eternally must lose it;

Better ends may be in prospect,
Deeper blisses (if you choose it),
But this life's end and this love-bliss
Have been lost here. Doubt you whether
This she felt as, looking at me,
Mine and her souls rushed together ? (St. VI)

(St. VII.) おお、しかし見よ！彼女の胸に閃めいた筈の悟りの光も、一瞬間された燃ゆる焰も、この世の名誉心のために嘲けられ、永遠に踏み消されてしまった。(“Oh, observe ! Of course, next moment,/The world's honours, in derision,/Trampled out the light for ever :”) Browning はここで一寸皮肉っぽくなる。彼によればすべての者が悟ったまま、嬉々として、生活することになれば、それは悪魔のよしとするところではない。それ故悪魔は人々が悟りを刹那的なものとして葬り去らせようと企てる、ということになる。Cristina も花咲くべく折角あたえられた愛の恵みを、華やかな生活のため棄ててしまったのであった。だから恐れ、思い惑う必要は全くないのだ。それとは別に神の秘義 (God's secret) を素直に直観し、受け入れた者はそのかち得たもの (prize) を更に一層大事にさせられる、と励まされる。(“—Making those who catch God's secret/Just so much more prize their capture !”)

(St. VIII.) (前述の) 当のその者こそ私である。その秘義を私は勝ち得た！彼女は私から目を反らすことによってあの大切な刹那の愛を忘れてしまった。そして私を失くしてしまった。しかし私はその刹那の靈感を真をもって、しっかり受け止めたので、精神的に彼女を私のものにした。だから私は愛する靈魂と瞬間一体になれたばかりでなく、永遠に愛の閃きを保持し続け、私の靈魂は完全な完成されたものとなり得た。私はこれをもって余生を送ることになるであろう、と若者は高らかに次のように歌う。

Such am I: the secret's mine now!

She has lost me, I have gained her;

Her soul's mine: and thus, grown perfect,

I shall pass my life's remainder. (St. VIII)

この詩は始めから St. VII に至るまで、その用いる用語も内容も、いつもの Browning らしく難解で苦勞させられたが、やっと St. VIII になって前半の 4 行は平易になり、読みやすく、詩全体を引き締め要約してくれている。この詩の主人公はその靈魂の目指す最高のたまものを以上の如く獲得したのだから、もはやこの現世は彼にとって用途のない仮りの宿になってしまい、平安とやすらぎにたものをおぼえるのであろうか。Browning は次のように結論している。

Life will just hold out the proving

Both our powers, alone and blended:

And then, come the next life quickly!

This world's use will have been ended. (St. VIII)

Edward Berdoe はこの詩についての評釈をするにあたって最初に Browning の恋愛観の真髓を手短かに説明している。これはすでにこの詩の中でかなり明らかにされているが、筆者がこれからとりあげる彼の他の詩全体にも流れる根本思想であるから、くどいようでもそれを引用しておく。

The passion of love, throughout Mr. Browning's works, is treated as the most sacred thing in the human soul. We are here for the chance of loving and of being loved; nothing on earth is dearer than this; to trifle with love is, in Browning's eyes the sin against that Divine Emanation which sanctifies the heart of man.⁽⁷⁾

(7) Edward Berdoe; *The Browning Cyclopaedia* (George Allen & Unwin Ltd., London, 1931) pp. 120-121.

(前記の要約。Browningにしたがえば愛の熱情は人の靈魂の中で最も聖なるものであって、我らはひとを愛し、愛される機会を得るためにこの世にある。それ故これに勝る尊いものはない。愛を軽んずるものは人の心を聖める神意を冒瀆するものである、と言うことになる。)

Berdoe は更に言葉を続け“Cristina”に言及する。“The man or woman who dissipates the capacity for love is the destroyer of his or her own soul ; the flirt and the coquette are the losers, —the forsaken one has saved his own soul and gained the other’s as well.”⁽⁸⁾つまり男でも女でも愛の情熱を乱費し、遊蕩に耽けるならば、彼又は彼女はその靈魂を破滅させる。放縦と媚を売るものは敗者となり、反対に棄てられた男こそ彼自身のたましいを救い、相手のそれをも我がものとするようになるのだと述べ、Browning がよく用いる“poetic irony”がここでも用いられていることを指摘する。

Sutherland Orr も Berdoe と同様にこの点を認め、かの若者は恋の挫折を経験したけれど、恋を知ったことにより彼の存在は豊かに、そして完成された、“…the existence of the man is enriched and perfected by it.”と述べている。そして“This poetical paradox is the strong point of the poem,”⁽⁹⁾とのコメントを残している。

[B] The Lost Mistress (失われた愛するひと)

(Kenyon の全集 Vol. 3, p. 137)

Mrs. Orr は“Cristina”の中心課題を“Love as the special gain of life”とし、“The Lost Mistress”のを“Love as the completeness of self-surrender”⁽¹⁰⁾としたが、彼女の言うようにこれは恋人としての愛を拒まれ、友情としての交際のみを許されたある中年の男の悲しい挫折感を述べた

(8) *ibid.*, p. 121.

(9) Mrs. Sutherland Orr ; *A Handbook To The Works Of Robert Browning* (G. Bell And Sons, London, 1927) p. 225.

(10) *ibid.*, p. 224.

詩である。男は胸に燃え上がる恋人に対する熱い思慕の情を抑制し、男らしく、謙虚に耐えているが、その心理がよく描かれているので高く評価されている。この詩は1845年に *Bells and Pomegranates, Part VII* 中にはじめて出版された各4行、5節からなる短詩である。この書かれた時と内容とから推定して、DevaneやDallas Kenmareはこの詩はBrowningとElizabeth Barrettとの恋愛事件と何らかの関係があるとみなしている。

Devaneは“The poem may well be from apprehended experience. Browning’s too sudden declaration of his feelings for Miss Barrett, after their first meeting on May 20, startled her almost into breaking off relations with him altogether, The poem was transmutation of experience into poetry....”⁽¹⁾と主張する。

Browningはかねてより閨秀詩人として^{VI} 令名の高かったMiss Elizabeth Barrettの詩をよく読み、深い敬愛の念をまだ見ぬ彼女に抱いていた。が1845年1月10日に友人John Kenyonの紹介で彼女に会う機会を得た。彼が彼女を一目見た瞬間から彼の靈魂は彼女のたましいを熱烈に愛してしまったのであった。病人の身で、しかも6歳年下のBrowningにいきなり熱情溢れる便りを連日のように送られたり、真剣に結婚の申し込みをされたりして、Miss Barrettはどんなにか動転したことであろう。彼女は彼をたしなめるような返事を幾度か書きおけている。彼女はおそらく彼にもう会はない方がよいと考え、例え会ったとしても、友人としてのみ、と宣言したのかも知れない。BrowningはKenmareも言うようにこの“The Lost Mistress”に托して愛を拒否された当時の彼の不安な沈痛な心境の片鱗をのぞかせていると考えてもよいのではあるまいか。

Browningはすでにもうこの時32歳であり、充分ものの分別のつく年頃であった、が問題はElizabethの方にあった。それ故Dallas Kenmareの言う

(1) Wm. C. DeVane, p. 147.

ようにこの恋の挫折は簡単な感情のもつれ等から生じたようなものでなく、もっと根深い障害が二人の間に横たわっているので、彼の申し出を受けることは出来ないと彼女は考えていたのであった。年令の差、再起不能だと思われる病弱の身、頑迷な父親の反対、多くの弟妹達の世話、等々がそれであった。

“This is no trivial dispute of misunderstanding, but a deep and grave trouble, reflecting in some degree the situation when Browning first rashly declared his love for Elizabeth Barrett, and was offered in return friendship only... the pain of such a situation is expressed...”⁽¹²⁾と Kenmare は述べているのである。

I

それでは何もかもおしまいなのか—
誰でもが最初に思っているように
真実というものは苦いものなのか？

(“All’s over, then: does truth sound bitter/As one at first believes?”)

と、詩は悲痛な詩人の言葉から始まる。しかしそれでも彼はなお Miss Barrett の家の軒場に、おやすみなさい、と囀る雀どもの声に心を止める余裕を見せている。(“Hark, ‘t is the sparrows’ good-night twitter/About your cottage eaves!”)

II

あなたの家の回りに生える蔦の新芽は
羊毛のようだ。今日私はそれに気がついた。
もう一日たてば新芽はぱっと元気よく
開く。—あなたはご存じです
その赤い色が、灰色になるということを。

(12) Dallas Kenmare; *An End To Darkness* (A New Approach to Robert Browning); Peter Owen Limited, London, 1962) p. 153.

このように Browning は激しく動揺する心を、静かに抑制しながら、一層控え目な穏やかさと、寛容と忍従をもって彼女に思いを馳せつつ、暫く自然の変化に目を移す。Berdoe はこの詩人の心中を推し測り、次のように称賛する。“A calm suppression of intensest feeling, the quiet resignation of a great love in a spirit of humility and sacrifice, by a man who has complete control over himself.”つまり彼は彼の受けたひどい打撃が、さ程のものではなかった、という風に振る舞う様子が見事に表現されていると言いたいのである。即ち“The pretence of not feeling the blow is exquisitely represented,”⁽¹³⁾とほめたのである。

III

さればこそ詩人は、第3節目で次のような希望的観測を続ける。しかし彼は友達として交際を許されただけでもよかったのである。だから彼は心静かに「それでは明日も又お会いしましょうね、愛する方よ？ お手を又とってもよろしいでしょうか？ 私達は互にただの友達同志、——そうですね。けれどそのただの友達が、私が断念した多くのものを保ってくれているのです。」という。

To-morrow we meet the same then, dearest ?

May I take your hand in mine ?

Mere friends are we, —well, friends the merest

Keep much that I resign: (St. III.)

IV と V

詩人は恋する人の輝やく黒い瞳の一瞥、一瞥を全力をつくして心におぼえているし、いつか彼女がスノードロップ（ゆきのはな）を返して欲しいと言った時のあの声も彼の心の中に永遠に残っている！けれど—。(St.IV)

彼はもはやこれからは彼女と、恋人としてでなく、ただの友達として付き

(13) Edward Berdoe, *op. cit.*, p. 257.

合って行くよりほかにない、と男らしく忍耐する。それでも彼は彼の真心を遠慮勝ちに、だがしっかりと次のように披瀝せざるを得ない。

「私はあなたとただの友達が話すようにしかお話し致しますまい、ただ思いのみは強くなるかもしれませんが；私は皆のものが許されるだけの長さしか、あなたの御手を取りますまい、ただかなうならば、ほんの少しだけ長く！」と。

Yet I will but say what mere friends say,
Or only a thought stronger ;
I will hold your hand but as long as all may,
Or so very little longer ! (St. V.)

Dallas Kenmareはこの最後の節について次のようにコメントする。

“But true love will wait for ever, in cool, undemanding friendship, if need be, if the beloved, and the ideal of love, can only so be served.”⁽¹⁴⁾しかし Browning は永久に待つことをせず、Elizabeth の愛を確かめて後、前に取りあげた Cristina の所で述べたような哲学的信念に基ずき、万難を排して、愛の力で死の恐怖におののいていた彼女を再起させた。それから彼女の弟妹の助けを得て、秘かに結婚し、手を携えて、ヨーロッパに旅立って行った。これはあまりにも有名な話である。

Arthur Symons はこの詩を“*This is one of those love-songs which we cannot but consider among the noblest of such songs in all Love's language.*”と過分すぎる程絶賛し、更に次の解説を加える。“*The subject of 'unrequited love' has probably produced more effusions of sickly sentiment than any other single subject. But Browning, who has employed the motive so often (here, for instance, and yet more notably in 'The Last Ride Together')* deals with it in a way that is at once novel and

(14) Dallas Kenmare, *op. cit.*, p. 153.

fundamental.”しかもこの詩には“There is no talk, among his lovers, of ‘blighted hearts,’ no whining and puling, no contemptible professions of contempt for the woman who has had the ill-taste to refuse some wondrous-conceited lover, but a noble manly resignation, a profound and still grateful sorrow which has no touch in it of reproach, no tone of disloyalty, and no pretence of despair.”⁽¹⁵⁾ Symons の指適するように愛の挫折を取り扱った詩は、ともすると病的なセンチメントの放出を見がちである。しかし Browning のこの詩にはそれがないのは救いである。彼は愛の挫折に組み伏せられることをよしとしない、気骨のある詩人であったからである。

[C] Andrea Del Sarto

“Andrea Del Sarto”は前述の2つの詩とは少し異った趣から、1人の画家が愛故に芸術的な墮落の道をたどる様を、Browning 独特な見事な dramatic monologue (劇的独自) の形を用いて描いてみせる。この詩は1855年に *Men and Women* の中の1編として出版されたのである。

Robert と Elizabeth Browning 夫妻が Florence に滞在中、親交の厚かった John Kenyon から Pitti Palace に陳列されてある Andrea と彼の妻 Lucrezia との肖像画の模写を買って来てほしいと頼まれた。しかしまだ写真が普及されていなかった時代のためなかなか模写は手に入らなかった。それで Browning は Frederic George Kenyon が“Browning wrote and sent in its place this beautiful poem, perhaps the finest of all his dramatic monologues, perhaps the single poem which one would select, if required, to represent him.”⁽¹⁶⁾ と激賞するこの詩を代りに書き送った。同様に A. Symons もこの詩は“...is a ‘translation into song’ of the picture known as

(15) Arthur Symons; *An Introduction To The Study of Browning* (J. M. Dent & Sons Ltd. London, 1923) pp. 79~80.

(16) F. G. Kenyon; *Vol. 4*, p. xvii.

‘Andrea del Sarto and his Wife’,⁽¹⁷⁾と賛えている。つまり Browning は依頼された1枚の絵の代りに、Andrea という主人公の劇的独白、という形で、一大傑作の詩を物にして、その頼みに答えたというのである。

Browning put *Andrea del Sarto* in the place of honour in the second volume of *Men and Women* and he gave the poem a meaningful sub-title, “Called ‘The Faultless Painter.’”⁽¹⁸⁾と William Whitla が指摘しているが、誠にこの「誤りなき画家」という言葉は意味深長で、色々な角度から考えられる。その意味の解明はこの詩を読み進んで行くにつれ、はっきり出来てくると思う。

この詩の原型が1486年頃 Florence の仕立屋の子として生れた画才豊かな Andrea del Sarto の生涯にスポットをあてて書かれたものであるなら当然彼の生涯を考察してやる必要がある。Andrea の生涯の物語は彼の弟子 Giorgio Vasari によって書かれた *Lives of the Painters* の中の最もすぐれたものの1つだと言われる。それによれば Andrea は幼い時から金工や木彫職人のもとに見習奉公に出されたが、それを嫌って画家の所に弟子入りし、12歳の時画才が認められ、当時一流の画家 Piero di Cosimo に師事し、Leonardo da Vinci や Michelangelo のデッサンを研究し、その腕前をあげた。それから日々の生計のため余り足しにはならなかったが教会の壁画を数多描き名声をとみに高めた。そして図抜けたその完ぺきな技術的才能 (technical facility) のため“the faultless painter (Andrea senza errori)”という敬称を得た。それでもなお収入が少なく貧しい老父母を養うのに苦勞した。その上彼は1517年頃 (彼が31歳) 未亡人で人目を引く美貌の持主 Lucrezia del Fede と結婚した。Andrea の画いた Lucrezia の美しい肖像はヨーロッパ中の主なギャラリーのどこにでも飾られている程だと序論で

(17) Arthur Symons; *op. cit.*, p. 105.

(18) William Whitla; *The Central Truth: The Incarnation in Browning's Poetry* (University of Toronto Press, Canada, 1963) p. 66.

Kenyon は述べている。Andrea 自身の有名な肖像もかの National Gallery に保存されてある筈だし、前述の Pitti Palace に於いては当然のことである。

1518年⁽¹⁹⁾に彼はフランス国王、Francis I から招かれバリーに赴く。当時老いていた Leonardo da Vinci 等を宮廷に集めていた王は Andrea を厚遇し、彼の天分が十分に発揮出来るように援助を与えた。しかし芸術を全く理解しない彼の妻 Lucrezia del Fede の切なる願により彼は Florence に休暇を貰って帰って来た。その節に彼は大金を国王に託され、フロレンスの名画や彫刻等の美術品を買入れてくるように依頼されていたが、彼は金のあるにまかせ妻のため新居を建てたり、ぜいたくな暮らしをしたりして、金を使い果たしてしまった。それ故再びフランスには戻れなくなり、日蔭者的な存在になり下がり、つまらない絵を書いて暮す羽目に陥ってしまった。さだかではないが、彼は両親を貧困の中に見殺しにしても、Lucrezia の親兄弟や友達のために暇なく絵を描いて貢ぎ、ひたすら妻の歡心を買おうと務めたらしい。そのため折角の天賦の才に恵まれながら Andrea del Sarto は終に世々に伝えられるべき芸術的な香り高い傑作を多く残すことは出来なかった。しかしそれでも幾多の 'faultless' な立派な絵画を残さなかったことはなかったことも事実である。

Andrea の伝記を書いた Vasari が、師の不貞なる妻を良く思わなかったことは当然であろうが、彼が後日 Lucrezia の不行跡に関して、初版で書いた記事を改訂したそうである。もしそうだとすると彼女が一般に言われる程の悪女でなかったかもしれない。又 Andrea が Francis I から依託された金を私用のために消費してしまった、と記されているのを、今日否定する者が多いとも言われる。しかしこの Browning の詩は Vasari の最初の記録によるものであって、後日とやかく言われる Vasari のあらわした伝記とは関係がないことを明確にしておきたい。だが Kenyon は "The poem is true, both

(19) Andrea が結婚した年、及びバリーに赴いた年等、研究者により異論はあるが、ここでは Kenyon の意見に従っておく。F. G. Kenyon; Vol. 4, p. xviii.

dramatically and biographically, to the events of Andrea's life.”と証し、
又“Browning's poem is true to all that is known of both husband and wife,
and has fixed their character and reputation for ever.”⁽²⁰⁾とも言っているの
も面白い。

さて今までは歴史的人物としての Andrea Del Sarto を見て来たが、これ
よりは Browning がこの画家をいかに取り扱い、それを基にしていかなる人
物像を創造して行くか、この詩に記された画家 Andrea の独白に焦点をあて
つつ、追ってみたいと思う。彼の独白は267行にわたる⁽²¹⁾。

Andrea は開口一番“But do not let us quarrel any more,/No, my
Lucrezia ; bear with me for once :/Sit down and all shall happen as you
wish./You turn your face, but does it bring your heart ? (11. 1-4) (「もう
争うのは止めにしよう。さあ、ルクレージア。1度だけでも良いから我慢し
ておくれ。さあおすわり。何もかもすべてお前の希望どおりになるようにし
てあげよう。)」と愛妻の怒りを静め、機嫌を取る。Andrea は Lucrezia の
夫が生存中にすでに彼女が持っていた数人の恋人の中の1人であったため、
彼は彼女と結婚後も他の男と彼女が交際しても文句のつけようがない、と観
念している模様である。今も例の如く Lucrezia は彼女の男友達の友達から
Andrea に絵を描いて貰いたいと頼まれたので、そのことで夫妻は争ったら
しい。彼はその男の注文するような絵を描くことを屈辱的に思うが、美しい
愛妻故に屈服する。先方が望むままの絵を、望む時に、望む値段で描いてや
ると約束する。その代りに次回彼女の可愛い手を握る時には、その報酬とし
ての金を握らせてあげる。この次も手を握らせてくれるかい？やさしくね。
と言う。しかしふと Andres は悲しい疲労感のようなものを感じてしみじみ
話しかける。

Oh, I'll content him, —but to-morrow, Love !

(20) *ibid.*, p. xviii.

(21) *Ibid.*, “Andrea Del Sarto” pp. 117-124. (the text)

I often am much wearier than you think,
This evening more than usual, and it seems
As if —forgive now—should you let me sit
Here by the window with your hand in mine
And look a half-hour forth on Fiesole,
Both of one mind, as married people use,
Quietly, quietly the evening through,
I might get up to-morrow to my work
Cheerful and fresh as ever. Let us try. (11. 10-19)

「依頼主のその男を必ず喜ばせてやる。だが今夜は描かないよ。私はお前が考える以上に屢々疲れることがあるのだ。殊に今宵はね。いつもよりはずっと。一さあ機嫌をおなおし。手と手を取り合って窓辺に一緒に坐って半時間程あの美しい連山に囲まれたフィエゾーレの町を眺めよう。結婚したばかりの若い2人が1つの心になってするように、静かに1晩中過せたなら、明日はいつものように元気で張り切って仕事にかかれるだろう。そうやってみようではないか」と Andrea は訴えるように話しつつ、彼女の軟らかな手をまさぐり、美しい顔や姿にあくことなく見入る。そして“You smile? why, there's my picture ready made,/There's what we painters call our harmony!” (11. 33-34) と Andrea は芸術家の眼から見ても彼女は完璧な美しさを備え持っている、心からはめ賛える。彼は彼の芸術を全く理解出来ない彼女が今夕、従兄だと称する男と出かけて行くことを百も承知でいながら、しばしの間それを忘れ、彼女の美に陶醉し、心の安らぎとインスピレーションを受けるのである。Sutherland Orr もそのことにつき次の如く言及する。 (“...he drinks in her beauty, and finds in it rest and inspiration at the same time.”)⁽²²⁾それなのに彼女は夫よりも愛する男の所に行こうとしている。

(22) Mrs. Sutherland Orr; *op. cit.*, p. 250.

心、ここにあらずという調子である。

とかくするうちに暮色が辺りを支配し始める。“There’s the bell clinking from the chapel-top ;/That length of convent-wall across the way/Holds the trees safer, huddled more inside ;/The last monk leaves the garden ; days decrease,/And autumn grows, autumn in everything.” (11. 41-45.)

Andreaはこの深まり行く秋の夕暮の静けさの中に妻と坐しつづ、2人の華やかなりし過去を振り返り、斜陽の時代を迎えねばならなくなった理由を深い悔恨とあきらめを持って語り続ける。

A common greyness silvers everything,—

All in a twilight, you and I alike

—You, at the point of your first pride in me

(That’s gone you know), but I, at every point ;

My youth, my hope, my art, being all toned down

To yonder sober pleasant Fiesole. (11. 35-40)

つまり彼はお前も、私も、すべてのもの皆が同じような銀鼠色の暮色に包まれてしまったというのである。批評家達はよくこの35行目の1行がこの詩の基調になっていると強調する。Andreaは更に「お前の知っているように、初めの頃お前は私に満足し、誇りをさえ感じていてくれたが、それはなくなってしまった。しかし私の場合は、私の若さも、望みも、技も、皆向うのフィエゾーレの丘のくすんだ彼方にぼかされて色あせてしまった」と歎く。彼はあたかも彼の絵や彼自身、又生れて来て彼がなすべき筈であった仕事も皆、1幅の秋の夕暮れの色をたたえた絵の如きものであったと嘆息する。それから彼は突然「愛しき人よ。私達2人は神の御手の中にあるのだ。神様が私達に踏みゆくべく与えられた人生は、何と不思議に見えることだろう。私達はいかにも自由そうに見えるが、実際はそうではなく、しっかりと縛られている！神様が足かせをおつけになられた。だからそのままにしておこう」とあきらめに似た、しかしある達観した境地を述べる。

...Love, we are in God's hand.

How strange now, looks the life he makes us lead;

So free we seem, so fettered fast we are !

I feel he laid the fetter : let it lie ! (11. 49-52)

しかし彼のいう枷^{かぎ}とは何であったらうか。ともかく彼は Lucrezia に部屋の中に並べてある彼の全作品を振りむいてよく見るように促す。「お前には私の芸術はわからないであらうが、人々がどんな風に評判しているか位は耳に入るだろう。……ほら、あのマドンナをみてごらん。あれこそほんものだ。ああいう風を書くべきだ。」と自慢する。(“—turn your head—/All that's behind us ! You don't understand/Nor care to understand about my art,/ But you can hear at least when people speak : .../It is the thing, Love ! so such things should be—/Behold Madonna ! —I am bold to say.” 11. 53-59.)

Andrea は説明しているうちに調子ずき、熱を帯びて話し続ける。「私は絵筆をとれば、知っているもの、見るもの、心の奥から書きたいと思うもの、それはめったにないことだが、それらを何でも描ける。しかも完璧にだ。先週法王の使節がなんと言ってほめてくれたか知っているだろう。フランスにいた時も大評判だったのだよね。とにかく絵を描くことはたやすい仕事だ。今私は下図を初めに描くことも、習作をする必要もない。それは私が昔やったことだ。」と胸を張ってみせる。「私は多くの絵かきが、生涯をかけて苦しみ、もがきつつ描き、失敗しては又描く、そんな絵は私にはすぐ描いてしまえる。この Florence の市中だけでもこのように苦しんでいる絵かきはお前のその指の数の2倍もいる。ちょっとしたつまらない駄作でも彼らには骨が折れる。効果が上がらないものなんだ。しかしそれでも不思議なことに例え彼等の描いたものが不十分なものであっても、形以上のものを描き表わすことが出来る。それなのに苦労しないで描ける私の絵にはそのようなものがない。ルクレージァ、私は裁かれている。」(“Lucrezia: I am judged”) と自らの欠けたる点を正しく評価し、かえりみる。

There burns a truer light of God in them,
In their vexed beating stuffed and stopped-up brain,
Heart, or whate'er else, than goes on to prompt

This low-pulsed forthright craftsman's hand of mine. (11. 79-82)

つまり Andrea は、彼等画家を悩ませ、苦しめ、動悸を打たせる、詰まって、塞がった彼らの頭脳の中に、あるいは心の中に、それとも彼らのほかの何かの中に、神様の真実の光が燃えている、と考える。それなのに彼自身は落ちついて、全く狂いのない、冷静な職人になり下がって、手を動かしているだけだということを認めざるを得ない。

Their works drop groundward, but themselves, I know,
Reach many a time a heaven that's shut to me,
Enter and take their place there sure enough,
Though they come back and cannot tell the world. (11. 83-86)

彼らの作品の描き方も、手法も、到底私のに及ぶ所はない。しかし彼らには、私に全く閉ざされている天上の世界を飛翔する精神的な何ものかがある。彼らはその天的な世界が何であるか説明することが出来なくても、しっかりその中の坐席を占めることが出来るのである。“My works are nearer heaven, but I sit here.”それに反し私の作品は高く評価されるかも知れないが、私は（私の精神は）この地上に止まっている、と歎く。

他の画家達は自分達の絵に関する世評に対し敏感に反応する。しかし Andrea は彼の信じるままに、心の赴くままに描き、世評には無頓着であった。しかしそこには何ら精神的な理想の追求とか、己を越えたものに対する憧憬の念など全くなかった、と自らの欠点を又もや正視する。

Ah, but a man's reach should exceed his grasp,
Or what's a heaven for? All is silver-grey
Placid and perfect with my art: the worse! (11. 97-99)

Andrea は以上の様に彼のいつわらざる心境を述べる。要約すれば次の通

りである。ああ、私は他人の褒貶に一喜一憂しないが、人たるものは自分の力の及ばぬほどのあこがれを持っていなければならない。(人の理想や目的はその手の届く所を超越した所のものでなければならぬ。)もしそうでなければ天は何のためにあるのだろうか。ところが自分の技を試してみるがよい。どこにも黄金の輝きを持つものはなく、すべてが落ちついた完全な銀鼠色である。それが駄目なのだ、というのである。Browning はここで又前述の 1, 35 でみたように、“silver”と“grey”と言う言葉を用いている。これは Andrea の芸術家としての欠陥は暮色 (greyness と silver-grey) 色に包まれ、それに埋没していることだ、ということを暗示し、彼は faultless だが、輝やきのない soulless な artist であると評しているのではないかと思われる。Sutherland Orr は Andrea の芸術に言及し、“...he lacked strength and loftiness of purpose; and as Mr. Browning depicts him, is painfully conscious of these deficiencies”⁽²³⁾と述べているが、正にそのとおりである。

Browning は彼の描く Andrea Del Sarto の持つ大方のこれらの弱点は許せるとしても、芸術家として soulless であることはそんなにたやすく見逃す訳には行かなかった。その理由は彼の“Rabbi Ben Ezra”という長篇の人生哲学的な詩をのぞいてみれば明らかにされると思う。彼はこの作品の中で我々人間が動物 (brute) より優れ、異なっている点は、我々が神と結び合い、有限なるものを、無限なるものに、結びつけようと努力する所にある。しかもそれがならないのを悲しみ、それ故に更に神に、より高きに、近づくようと努力する所に、人生の尊さがある。この人生の苦痛を味わったことのない人には、人生の秘義は解し得ない。悲哀と苦痛を忍んで、努力して流した汗と涙は尊い。これがなければ^{たましい}靈魂 (soul) は充分に発達し得ないだろう、という⁽²⁴⁾。このことは Andrea にはよく認識出来なかったらしいが、彼に欠けていたのは正にこの苦労を重ねて、より高き理想と目的とを追い求めて精

(23) *ibid.*, p. 249.

(24) F. G. Kenyon; Vol. 4, “Rabbi Ben Ezra”, st. IV-VII. p. 262.

進することであった。これが欠けていたからこそ、彼の作品には生命力がなく、人に訴える何か欠けていると Browning は判断し、Andrea をして深い反省の言葉を度々言わしめている。さらに彼は積極的に“*What I aspired to be./And was not, comforts me;*”（「我、憧れて求めたれども、得ざりしもの、我を慰む。」）(st. VII.) と Ben Ezra が言ったのように Andrea にも言わせたかったのではないかと想像できる。しかし Andrea はそのようなことを思うだけの artist ではなかった。Browning は彼の傑作“*Saul*”の中の語り手 David に“*This;—’t is not what man Does which exalts him, but what man Would do !*”⁽²⁵⁾（「人を高めるのはその人のなすところによらず、そのなさんとする所にある。」）と言わせているが、彼は彼の描いている Andrea を不憫に思いつつ、自分の日頃からのこの考えをこの場合にも反芻してみずにはいられなかったのであろう。

Browning は常に種々なる人々、つまり人間そのものに最大の関心と興味をもっていたことは誰れしも知る所である。彼は人の外面ばかりでなく、人の心の奥底までのぞき込み、深い洞察力をもって、その心理を見事に解剖してみせる。この作品に於ける Andrea の心の動きに対しても彼は単に上記のような文芸批評家の眼で観察するだけでなく、血の通った弱点だらけの人物像を、理解と同情をもって描いて行く。

Andrea は妻の美しい手を愛撫しながら、Vasari におくられた Rafael (Raphael) の描いた Madonna に見入っている。Andrea は Rafael が国王や法王たちに自分の描く絵を見て貰うため、たましいを込め、天よりの助けを求めつつ描いたことを知っていた。それ故その絵に籠められた soul は技術をはるかに凌駕している。だが技術の面に限って言えば、それは確かに破綻を来たしていることをみとめて、次の如く言う。

Well, I can fancy how he did it all,

(25) F. G. Kenyon; Vol. 3, “Saul”, st., XVIII. p. 196, l. 295.

Pouring his soul, with kings and popes to see,

Reaching, that heaven might so replenish him,

Above and through his art—for it gives way; (ll. 107-110)

しかし彼はすぐに faultless な絵かきの本領にもどり、あれこれと Rafael の技術上の拙なさを批判し、私なら直せる、“I could alter it:”と虚勢を張る。それでも又すぐ、その絵の中にあふれているその生き生きした動き、その識見、その緊張、それにはとてもかなわない。とてもかなわない！それにしてもそれは何故だろう、と落胆してしまう。そして“*But all the play, the insight and the stretch—/Out of me, out of me! And wherefore out?*” (ll. 116-117) と、嘆く。Andrea は自分に対して、もし妻の Lucrezia が Rafael の魂が、あたえられたような絵画の生命の源泉をあたえてくれたならば、彼と妻は Rafael と同等の高い領域に達することが出来たであらうのに、とつけ加える。“*Had you enjoined them on me, given me soul,/We might have risen to Rafael, I and you!*” (ll. 118-119) しかし彼は彼女にそれを求めても、それを与え得る女性でないことは百も承知していたので、彼女を非難したり責めようとはしない。むしろ妻の機嫌をとって、その類まれなる美貌と美しい声色をもって、彼のために幾度もモデル台に立ってくれたことを感謝する。「お前は私の頼んだことは何でも皆してくれた。何倍もよくつくしてくれた。」と。“*Nay, Love, you did give all I asked, I think—/More than I merit, yes, by many times.*” (ll. 120-121) それでもまだ足りないらしく「もしそれに加えて、私の画を生かすため soul をあたえてくれていたら……」と愚痴をのべる。Browning はここで、Andrea が妻によらねば芸術上の inspiration が得られぬ、という優柔不断な不甲斐ない性格をよく表現していると思う。

芸術家の妻たちがよくその夫を励ますために言ったように、お前がもし、「神とその栄光を求め、金や利得のことを考えないで下さい。あなたの未来のことを思えば、現在がそんなに大事なのですか？ミケランジェロと共に名

誉のために生きて下さい。ラファエロも待っていますよ。3人お揃いで神の御許に、どうぞ！」即ち

“God and the glory ! never care for gain.

“The present by the future, what is that ?

“Live for fame, side by side with Agnolo !

“Rafael is waiting : up to God, all three !” (ll. 128-31)

と言ってくれたのだったら、私はお前のためにそうしただろうに。そう、そう思えるかもしれないが、そうならなかったかも知れない。万事が神様の御意志のままだ。それに従うより外はない。“I might have done it for you. So it seems :/Perhaps not. All is as God over-rules.” (ll. 132-33) と Andrea は意志の弱さと氣迫の足りなさを、又もや示す。

これから更に Andrea の悲痛な独白が綿々と続く。彼は“... incentives come from the soul's self ;” (刺戟は自分自身の soul の奥から湧き出るもの) という自己の欠点の指摘と反省とがあたえられる。つまり自分が soulless な絵しか描けないのを、妻や他のものの刺戟や励ましの欠乏にかこつけるのは誤りであることを悟らせられる。その理由として Raphael にも Michelangelo にも妻がなかったのではないか、それなのに自分は何故に妻を必要とするのか、と自問自答する。この世には、power 即ち力があって、何事でも成し得るのに、それを成し遂げようとしない者がいる、かと思うと反対に、何か成し遂げようと意志しても、それを思うように成し得ぬ者もいる。それ故、不完全な我々人間は苦しむのだ。前者は「力」を持つ Andrea 自身、後者は「意志」をもつてもなかなか思うとおりに出来ない Rafael と Angelo であるが、いずれも価値あるもの、と Andrea は考える。そして神は分に応じて、報いや、罰を与え給うと確信する。

Andrea は自分がパリ (Paris) で、しでかした恥ずべき不始末を振り返りみる時、神の報いが、厳しく自分に与えられ、貧しく暮している方が心やすまると述懐する。というのは、いつも彼は自責の念にかられ、パリから出て

来ている貴族達に会うのがはばかられ、妻が知っているように、終日外出できない。たまたま彼らに街であっても、彼等が横を向いて通りすぎてくれると良いのだが、と思うが彼らは時々話しかけてくる。それでも自分はそれに耐えねばならないと沈痛な面持ちになる。

I dared not, do you know, leave home all day,

For fear of chancing on the Paris lords.

The best is when they pass and look aside ;

But they speak sometimes ; I must bear it all. (ll. 145-148)

自分が妻故に犯した罪のため、戦々恐恐としている、いかにも小心で、正直者の Andrea の姿が Browning の手によって行間から浮び上がってくるのを読者は感じるであろうと思う。

Andrea は人々が自分の裏切り行為を話題にしても仕方がない；(“Well may they speak !”) と観念する。そして過去の栄光の日々をゆっくり追想し始める。Andrea は 5 年前に Francis I から Fontainebleau の宮廷に迎えられ、そこで、Rafael が受けたと同じ栄光を身にうけたのであった。寛大にして仁徳高き王の優渥なる恩寵の下で、御側近くはべり、朝臣にかこまれて、彼は絵筆を取った。彼らは王と同じ称賛の目で彼の絵をみてくれた。そんな時たしかに彼の心は時々地上を離れることがあった。(“I surely then could sometimes leave the ground,”) (l. 151) 宮廷人たちはフランス人独特な眼で、火のように燃える情熱を湛えた眼で彼の描くのを眺めていた。彼も彼らの心に刺戟されて、ぐんぐん筆を運んでいたが、その時彼は今、目の前にある Lucrezia の顔を思い出していた。「遠くフランスの地にあっても、私の仕事の完成を待っているお前の顔をみることが一番の望みであった。この時こそが私の最良の時、私の王者の日、ではなかったろうか？」(“A good time, was it not, my kingly days ?”) (l. 165) と彼は妻にその当時を思い出させようとする。「その時もしお前が辛抱し切れなくなりさえしなかったならば一だが判っている—もうすんだことだ、私の本能がそれでよいと

言ったのだから。」Andreaは切角の登り坂の人生をFrancis Iのもとでつかんでいたので、彼の愛妻に呼び戻されて帰って来た。これがそもそもの間違いであった。しかし彼はここでも、妻に責任を転化せず、自分で責任を取ろうとする。ここにAndreaの妻に対する愛の深さ、と苦悩が見られると思う。次の数行はその時にのべた妻に対する熱烈な愛の表現である。

You called me, and I came home to your heart.

The triumph was—to reach and stay there ; since

I reached it ere the triumph, what is lost ?

Let my hands frame your face in your hair's gold,

You beautiful Lucrezia that are mine ! (ll. 172-176)

上記の大意—（お前は私に帰るように呼んだ。それで私はお前の胸に帰って来た。栄冠はお前の許に帰り、そこに止まることだった。志した栄冠を未だ得ないうちに、お前の胸に戻ったとて、何の不足があるろうか。お前の金髪でお前の顔を包み、私の手で抱かせてほしい。私のものである美しいルクレチアよ！）

AndreaはRafaelの描いたMadonnaとAndrea自身が愛妻をモデルにして描いたMadonnaを見ながら、あれこれと批評をこころみる。結極彼はRafaelより優れた技量を恵まれ、その上美しい妻を持っている点で幸運だということになった。Andreaの腕前がよりすぐれている証拠として、以前に巨匠Michelangelo自らが、Rafaelに向かってAndreaのことをほめたという話を妻に思い出させようとする。しかし彼女がそれをすら心に止めていなかったのを情けなく思う。RafaelがかつてVaticanの装飾を唐草模様にしようと考案し、熱中していた頃Angeloは彼に向かって、もしAndreaにもRafaelと同様に法王や王からの依頼があったなら、彼の天才は見事に発揮されるであらうと話したということである。つまりAndreaの芸術に芽が出なかったのはchanceがあたえられなかったからでもあり、又機会を逸したからでもあった。それなのに妻にはAndreaの天才が全く理解されていな

い不運を彼はかこつ。彼がながめていた Rafael の Madonna の腕がやはり
気になるので一寸内緒で直してみせようと、妻にチョークを持って来らせる。
そして線を引いてみるが、やはり Rafael の魂には及ばない。「さすがに
Rafael だ！消してくれ！」とその線を消させてしまう。（“Give the chalk
here—quick, thus the lines should go!/Ay, but the soul! he’s Rafael! rub
it out!”）(II. 196-97) やっぱり彼は Rafael の精神力に敗北感をかくせない。

彼の美貌の妻は夫が画家として大成するための機会があたえられなくても
少しも残念に思うどころか、今のままでいることをむしろのぞんでいる。
Andrea にとっても、今はもう愛妻の微笑が唯一の慰めとなりはててしまっ
た。彼は今その微笑を見ながら過したし時間こそは、まことの意義ある 1 時
間であったという。（“This hour has been an hour!”）それで彼はもし妻が
今夜のように毎晩一緒にすごしてくれたなら、もっと良い仕事が出来るだろ
うし、もっと多く描き、もっと金をもうけ、お前にもっと多くあげられる
ようになるという。（“If you would sit thus by me every night/I should
work better, do you comprehend?/I mean that I should earn more, give
you more.”）(II. 205-07) 夫の才能も芸術も理解しない妻への愛のため、
Andrea は彼女の金儲けの手段として働く生涯に甘んじなければならないの
である。いたましい中年男の悲哀が身にしみるようだ。

Andrea は妻にごらん、夕闇が迫まって来て、ほら、星がまたたき始めた、
と空を見あげる。Morello の山も影をひそめ、警備の明りが城壁の辺りに見
える。梟はその名の如くクークーと鳴いている。さあ、もう家の中に入ろう
と夫は妻をうながす。Andrea はフランスから帰ってから妻と楽しく暮すた
め、家を建てたが、King Francis から美術品を買って来るように、と委託
された大金を贅沢に建てる家のため注ぎ込んでしまった。だが神様は正しい。
“God is just.”だから彼等は予期した仕合せは得られない。Andrea は派手に
建てた家を眺めつつ毎夜、恩恵を受けた王に対して良心の苛責に責められる。
しかし王は多分許して下さっているだろうから、せめて二人は仲良く愛し合

って行こうと言う。

その時、外から先刻の従兄の訪れた気配がする。“Must you go ?/That Cousin here again ? he waits outside ?/Must see you—you, and not with me ? Those loans ?”と Andrea は憂うつになる。夫にやたらに絵を描かせ、それを売って、金を得て、従兄たちの賭けの借りを払わせようとするのだから誠にひどい。しかし彼は又もや Lucrezia の微笑で買収されてもよいと思う。「お前の微笑を買うために、明日は何枚でも絵を描こう、どんな高い金でも払ってあげよう」とじれったくなる程の忍耐強さで約束する。だが Andrea は今宵だけは静かな黄昏の中に坐して、今一度フランスに帰って、もう 1 枚だけ、妻をモデルにしない聖母の絵を書きたいので、ゆっくりその構想をねりたいと願う。

Andrea は夕方の静寂さの中で自分の一生を振り返ってみて Francis 王に対する裏切り行為、貧しい両親に対する親不幸等、反省し、心を痛める。自分も努力したが、報いられる所が少なく、名のある画家にもなれなかった。その代りにしかし、美しい妻を勝ち得た。今夜は一切を諦めた老人のような落ちつきを見出している。最早不可能なるものへの挑戦はあきらめた。“You loved me quite enough, it seems to-night./This must suffice me here. What would one have ?” (ll. 258-59) 「お前に今夜は愛して貰ったのだから、満足せねばなるまい。それ以上はのぞむまい」と思う。しかし未来には、天国でもう一度新しい機会があたえられるかも知れない。つまり彼は基督者が赴くべき天国の四方の壁に 4 大画家即ち Leonardo と Refael と Michelangelo と Andrea 自身が筆を揮うことが出来ると想像する。しかし Andrea はここで又袋小路に追い込まれて立ち止まらざるを得ない。というのは彼以外の者には妻がいない。持っているのは Andrea だけである。それ故彼はまたこの世に於けると同様に彼らに勝ちを譲らねばならないであろう。そして彼等は私に勝つが、私には私の選んだ Lucrezia がいるからよいと言う。つまり彼は名誉や勝利より、ひたすらなる愛に生きる道を選んだのであ

った。

ここで Andrea の瞑想は、従兄の吹く口笛で、中断される。「行っておやり」と彼がいう。(Again the Cousin's whistle! Go my Love.) これでこの長い独白は終る。

筆者はこの詩を愛の挫折の一つと考えたのは、限りなき愛を1人の女性に捧げた Andrea の愛が実らず、むしろ利用され、踏みにじられていくのを見たからである。しかし愛の挫折の苦い杯を飲み干して後にもなお、未来の世まで何より妻を愛し続けるという Andrea は果たして真の意味での敗残者であったらうか。Browning のもつ意味はまことに深長である。Kenmare が指摘するように Andrea には素晴らしいものがあると思うのでここに引用しておく。その他以下2人の評価も参考のため引用しておきたい。

“But whatever other attributes may have been Andrea's, his courageous, uncomplaining acceptance of an impossible situation reveals him as, in his way, a man of great stature. He understands the futility and inadequacy of blame in these tragic human situations, and would not, if he could, blame his lovely wife Lucrezia.”⁽²⁶⁾

Mrs. Orr は“... the poem might be classed as critical. But it is still more an expression of feeling; the lament of an artist who has fallen short of his ideal—of a man who feels himself the slave of circumstance—of a lover who is sacrificing his moral, and in some degree his artistic, conscience to a woman who does not return his love. It is the harmonious utterance of a many-sided sadness....”⁽²⁷⁾と評している。Symons は Browning としては珍しい面をもった人を描き出しているのに注目し、次の如く述べている。

(26) Dallas Kenmare; *op. cit.*, p. 154.

(27) Mrs. Sutherland Orr; *op. cit.*, p. 249.

The mood of sad, wistful, hopeless mournfulness of resignation which the poem expresses, is a somewhat rare one with Browning's vivid and vivacious genius.⁽²⁸⁾

参 考 文 献

1. *Men And Women* Vol. I, (Kenkyusha British & American Classics No. 111) 1963. (With Introduction & notes by Kenji Ishida and Rinshiro Ishikawa.)
2. *Men And Women* Vol. II, (Kenkyusha British & American Classics No. 112) 1961. (With Introduction & notes by Kenji Ishida and Rinshiro Ishikawa.)
3. *Selected Poems of Robert Browning* (Kenkyusha British & American Classics No. 113) 1964. (With Introduction & notes by same as above)
4. 大庭千尋訳「ブラウニング・男と女」 国文社 1975.
5. 大庭千尋著「ブラウニング詩集」 国文社 1977.

(28) Arthur Symons; *op. cit.*, p. 106.